

各地でいろいろな「木づかい」が行われています ～木づかい推進月間を中心とした取組～



ウッドデザイン賞展示（木と住まいの大博覧会（京都））

木を使うことは、みなさんの暮らしにもお住いの地域の環境にも多くのメリットがあります。そのことを多くの方々に知っていただき、木材の利用を拡大していくための国民運動として、林野庁では、「木づかい運動」を展開しています。毎年10月の「木づかい推進月間」を中心に、各地域で様々な取組が行われていますので、ここではその一部を御紹介します。

1 木育参観授業

10月6日に、徳島県の徳島文理小学校で、木材会社の有志で結成された「Wood Action Tokushima」により、3年生58名の生徒を対象に木育参観授業が行われました。山で50〜60年育てられた木で家や家具が作られていることや、木材利用技術の紹介などの木育授業の後、「箸づくり体験」、「木の塗り壁体験」、「つみき知育遊び」を体験しました。子供達は木の香りや、つるつるした感触に大喜びしながら、体験や知育遊びを楽しんでいました。



▼箸づくり体験



▲つみき知育遊び

「Wood Action Tokushima」による木育参観授業（徳島文理小学校）

2 「木になる紙」の出版

10月17日〜19日に滋賀県で開催されたイベントにおいて、（一社）木になる紙ネットワークにより「木になる紙」が出版されました。「木になる紙」は、間伐材を原料の一部に使用し、売上げの一部が森林づくりに還元される仕組みが特徴です。製造業や流通・販売業者3万人近くが入場し、「木になる紙」のブースには、地域の間伐材を使った間伐紙の製造や還元金の仕組みについて多くの相談が寄せられるとともに、購入契約もその場で成り立ったそうです。

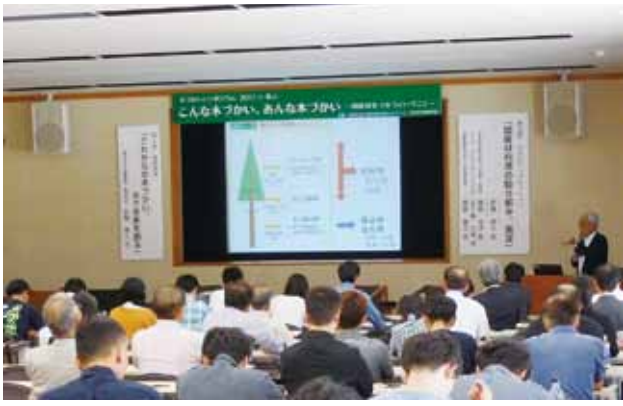


びわ湖環境ビジネスメッセ2017への「木になる紙」のブース出版（長浜バイオ大学ドーム）



3 木づかいシンポジウムin高山 こんな木づかい、あんな木づかい 〜国産材を使うということ〜

9月9日、多くの家具バイヤーやデザイナーの生徒が参加の下、岐阜県高山市でシンポジウム（主催：（特非）活木活木森ネットワーク）が開催されました。基調講演「これからの木づかい、木で未来を創る」では、安藤直人東京大学名誉教授より、法隆寺等の日本の伝統である「木の文化」と、CLT等の新たな技術である「木の文明」のバランスが大切であるといったお話がありました。



2017 飛騨の家具フェスティバルと同時開催された木づかいシンポジウム（飛騨・世界生活文化センター 食遊館 B1 階 大会議室）

伝統的な組木技術を使った家具やものづくり、デザイナーや職人たちの交流の場の提供などを行っている『(株)飛騨の森でクマは踊る』の諏訪光洋氏、資源量が多いものの家具への利用はまだ少ないスギ材の圧縮加工による家具の製造等に取り組む『飛騨産業(株)』の岡田賛三氏、家具やインテリアのデザイナーを手がけ、武蔵野美術大学空間演出デザイン学科特任教授でもある、デザイナーで『イガラシデザインスタジオ』の五十嵐久枝氏の3名に安藤氏を交え、議論が交わされました。

「木材は本来、幅広い使い方ができる優秀な材料であるが、燃えやすいのはといったマイナス面ばかり強調される時代になっている。木は古い材料のように言われるが、実は最先端」という指摘がありました。また、「とにかく木を使えばよい、全て木材、それも無垢材ということではなく、デザイナーや空間全体を考えた利用、圧縮材の活用、荷重のかかる椅子の足にはスチールを使う、場合によってはモルタルで不足部分を補うようなそれぞれの材料の良い部分を活かす使い方も大事では」といった意見が各方面から出ました。話題は、近年減少傾向にある材木店等を始めとするエンジニアとデザイナーとの連携の難しさにも及び、まだまだ聞き足りないといった会場の雰囲気の中、シンポジウムは幕を閉じました。

4 木づかいセミナー 木を知り、木を楽しむ

10月28日には愛知県でセミナー（主催：（特非）活木活木森ネットワーク）が開催されました。冒頭の基調講演「木の香りと健康」では、東京大学名誉教授の谷田貝光克氏より、木の香りに含まれる物質α-ピネンのリラクセス効果や、赤ちゃんの産湯に木製品を使うと大人になってもその香りを思い出すといった話がありました。

続いて、山と木にまつわる多様な分野で活躍する方々から事例紹介があり、地方公共団体が地域の材料で制作した誕生日品の贈呈を行う「ウッドスタート」などを行っている『東京おもちゃ美術館』の馬場清氏からは、各地での木育の取組は単に木を利用するだけでなく、ライフスタイルや価値観を変えるようなものであるべきとのお話がありました。

銀座の和菓子店『銀座かずや』の創業者である古閑あさ珠氏からは、樹齢200年の「ゆず」の木との出会い、その実を使い、障がいを持った方々と一緒に加工する取組を行ったこと、ゆずの豊作の年には5万個のお菓子を売り切ったエピソードが紹介され、森の恵みに手を加えることで経済が循環するといったお話がありました。

また、『国際航業(株)』の加藤哲氏から

は、山の所有境界がはっきりしない、森林の資源量などの情報が皆が使える状況になっていない、といった現状を踏まえ、山にどのくらいの材があり、どんな地形になっているかといった客観的なデータを整備することの必要性や、整備のためのドローンやレーザーを使った取組について紹介がありました。

最後に、井上裕依子氏（井上電設(株)）の進行によりパネルディスカッションが行われ、木造の家に住んでいますかという、パネリストへの質問に、会場が湧くシーンもあり、オープンステージで行われた本シンポジウムに、足を止めて聞き入っている人々の姿も見られました。



ウッドワンダーランド 2017 会場内で開催された木づかいセミナー（ポートメッセなごや）